

平成 18, 6, 26

武庫川流域委員会

委員長

総合治水 WT 主査 松本 誠 様

酒井 秀幸

意見書

武庫川狭谷にダムを建造することに反対する私の視点

1995, 巷間の噂話としてダム建設が進行しているという情報をもとに宝塚土木事務所を訪れ、担当者から武庫川ダム建設は既定の事実であることを知らされた。

その後ダム建設に至る経緯を問い合わせるため県庁へ出向しダム建設反対の意を伝えたがその時点での回答は以下の通りであった。

- ①新造する武庫川ダムは穴あきダムで自然に優しい構造であること。
- ②レクリエーション的効果もあること。
- ③既に建設省も認めており国の予算もついていること。
- ④ひと握りの市民の声で県の河川政策の変更はあり得ないこと。
- ⑤武庫川狭谷のアセスメントも終わっていること。

以上のような情勢下で武庫川ダム建設は不動のものであるという印象をうけた。

突如降って湧いたようなダム建設に驚愕した市民が相集い地を這うような反対運動を起し、ダム建設反対の勉強会、シンポジウムを開催した。また予定されているダムサイト地点でダム建設の中止を求める署名活動を起し6万人近い賛同者を得て1997.4武庫川の

自然を守るためのダム建設の中止を要望する署名簿を貝原知事に提出した。

以降、われわれは草の根運動的なダム建設反対運動を展開するも県当局はダム建設の必要性のPRが足りないと言う見解から武庫川出前教室など開催しまた一方では武庫川ダム説明会を開催するが市民の質問攻勢に遇い遂に立ち往生となった。

2003.9 貝原知事をして武庫川の治水をゼロベースから検討するという県の態度が百八十度一転し武庫川委員会準備会議を経て今日の武庫川流域委員会の存在がある。

ここで特筆すべきは既に動き始めていた武庫川ダム建設をストップせしめ、知事をしてゼロベースから検討すると言わしめたのは約六万人近い人々の武庫川狭谷に対する熱い想いでありダム建設によって起きる自然破壊を何としても防ぎたいという願いが込められた要望書の重さである。

四季折々、武庫川を訪れる人びとの熱い想いとは一体何なのか。それは熾烈な競争社会を生きる人びとにとって唯一訪れる憩いの場所であり、荒廃する社会の心のオアシスなのである。まさに日本人のこころのふるさと、とも言うべき山紫水明の地武庫川狭谷を今の姿のまま次世代に申し送ることは今日を生きるわれわれに課せられた義務でもあると思う。山の緑と断崖と流水と大自然の織りなす天然の美しさのなかに無機質な巨大なコンクリート構造物を持ち込むことそれ自体は自然破壊の何ものでもない。

ダムが景観を損ねる対策として植樹をしてダムの姿を隠すという発想はあまりにも悲しい要はダムそのものの存在を否定するものである。。

以上